

地理学及び地理教育に於ける

若干の基本的問題点

坪内庄次

(一) 法則か、個性か

地理教育特輯号の発刊に当り、地理学及び地理教育に於ける基本的問題点に当るであろうかと考え及んだ私の目下悩みつある若干の問題を提起し、私は私なりのこれに対する見解を披瀝して、課せられた責任の紙数を塞ぎたいと思う。

代我が国の教育の究極目標として如何なる人間像が描かれねばならないか——一応公式には定められているものの、こそ教育の最も基本的問題点として、これを論ずれば私は私なりに一つの意見が成り立つであろうし、又教育に携わる者に、お互にこの問題について絶えず悩み続け考え続けるのが、我が国の教育の進歩を来す所以であろうと思うのであるが、ここではこれについては論じない。それはそれとして一応定められているとして、さて地理教育とは、国語や数学・理科を通してではなく、外ならぬ地理を通してその目標の達成に努力するものであることは申すまでもあるまい。そこで地理教育の第一歩は、「地理とは何ぞや」についての、深き洞察と正しい把握が要請せられるものであることは当然であろう。

ところで、地理とは何ぞやとの問題は、そう簡単に解決のつく問題ではない。本誌の前々号及び前号に、高野助教が真向からこの問題に立ち向われ、明快な論旨で要領よくこれをまとめられたことには敬意を表する次第であるが、その末尾にも、「この小論が批判を呼び、論争のきっかけを作るならば、これ以上の喜びはない。筆者としては問題にされないことの方が悲しいのである」と述べて居られる如く、問題はつきないものである。我々ほどのような地理学観に依拠して地理教育を推進すべきであろうか。最近、「児童生徒は地名を知らなすぎる」等との卑近な非難が存するとしても、古い暗記的な、物語的・百科辞典的・旅行案内的地理は、より高い地理的認識への資料であり手段であろう。地名知識欠除の問題は、寧ろ児童生徒の身心の発達段階に依じての地理的認識の問題として、即ち人類の地理的認識の発達段階の示すところと相応じて考慮すべき教授法の問題ではないかと私は考えている。それでは次に我々は、立地論・分布論・環境決定論・地人相関論・相互作用論・景観論・地域論等々、十八世紀以来の地理学観にして現代にまで流れを引く多くの地理学観の、孰れに依拠して地理教育を推進すべきであろうか。

紙数の関係上、短刀直入、私の結論を申すならば、地理的認識の究極の目標は何かといえは、やはり「地域」であろう。ここに現代地理学観の主流があると思われる。ところで「地域差」と云い「地域性」と云うとき、それは諸々の条件の組み合わせをつた結果の、地的に渾一された、他の地域とは代置できない、その地域の個性についてである。かくて普遍性と云い

一般性と云う、即ち地理的法則という概念とは全く相対立する名辞ではないか。

方法分化的に科学を分類する時、法則科学なりや記述科学なりやは、地理学方法論に於ける基本的問題点の一つとなり得るであろうと思う。ところで、凡そ法則とは、实在（具体）の中から抽象化に抽象化を重ねて共通なるものをぬき出し、それを反覆生起するものとして取扱うが故に、時空を超越する筈である。例えば自然科学に於ける「落下の法則」は、古代に於ても現代に於ても、又日本に於ても米國に於ても適用される。これこそ正に普遍的法則である。これに反して記述は事象の存在を離れない。この意味に於て地域（空間）を離れない地理学は、時代（時間）を離れない歴史学と共に、記述科学に位置づけられねばならないようであるが、唯、地理的事象の何故に成立するかを説明し理解するためには、二つ乃至三つの地域の地域的対比のみでは、より一般的普遍的なる法則の知識を借らざるを得ない結果となると思うのである。ここで法則なる用語をうち棄てて、マックス・ウェーバー流の理想型の概念を借用し、それを手段とし写鏡として、地域性を認識すべきではないかとするのが、私の学生諸君に対する平常の論法である。然し、理想型は如何にして把握するか。やはり抽象化の所産であり、抽出された結果を法則と呼ぼうが、理想型と呼ぼうが、将た又傾向とか蓋然とかの言葉で呼ぼうが、やはり具体より抽象への思考所産に外ならない。但し、いずれでもあれそのような一般的な尺度に照らしてこそ、始めて眞の個性が浮彫りにされる筈である。

地理的認識にもそのようなものが欲しいのである。法則か個性かは、凡そ學問が、断片ならぬところの統一をもつ知識であるが為の、盾の両面でないだろうか。自然科学に於ては法則が重要な地位を占めることはいうまでもないが、それに關する記述も亦重要な意義をもつ。物は落ちる（落下の法則）。然し羽毛は舞い上る。羽毛の実体（個性）は、落下の法則のみでは如何とも把握されないが、落下の法則に照らして考慮して始めて眞なる把握が成就する。社会科学も亦然りと云えると思う。

他の多くの社会科学部門、特に経済学などに於ては、理論・記述・政策の三部門が次第に定立され来つて居るようである

が、私は地理学に於ても理論と地誌と政策の三部門が成立して行くべきではないかと考えている。

ともあれ地理学と不即不離の關係に立つべき地理教育が、何時までも十八世紀の地理学觀、否甚だしきは古代の地理学觀に依拠して停滞を続けることは許されないのであろう。

(二) 自然か、人文か

自然と人間との關係を考察するというのがカール・リッター以来の近代地理学のオーソドックスな考え方であつた。ところで、その自然と人間との關係を如何に考へるかが、所謂地理学觀なるものの成立する基本的由来でなかつたかと思う。自然と人間という二つのものの關係であるから、その結びつきの仕方に対する觀方は三つしかない。(1)人間が先(原因)で自然が後(結果)である。(2)自然が先(原因)で人間が後(結果)である。(3)以上のどちらでもない(折衷案)。

フリードリッヒ・ラツェルが指摘したといわれる言葉を敢てここに借りるまでもなく、地理学はカール・リッターがこれを革新して以来、特に好んで古来の哲學的問題にたるところの、自然と人類との間、舞台と歴史との間の關係をとりあげてこれを解決しようとする方向をとることとなつた。なるほど自然と人間、別の言葉でいえば自然と社会との關係を如何に考へるかというところは、古来の哲學的問題の核心に触れる点であるといえる。即ち存在と意識との間の關係をどう見るかということが、古来の哲學の根本問題ではなかつたか。そしてこの根本問題に対する我々の解答の仕方は三つに限られる。第一に存在が先だとすれば唯物論への途がひらける。第二に意識が先だとすれば觀念論への途がひらける。第三にその孰れでもないとして別の世界に逃避するか。そこで我々の場合、存在の代りに自然を、意識の代りに人間を置き代えて考へてみれば如何であらうか。

自然と人間との關係を如何に把握して行くかにより、問題が問題であるだけに、そこに地理学觀の様々な意見の対立が生まれるのは当然である。しかし答案の書き方は大別して三つに限られる。第一に人間を先(原因)として自然を後(結果)とせんか。カール・リッターの所謂一地球の構成は人類を完全ならしめるため保護するための神のプランに、争う余地なく

符合している」というが如き、正に形而上学的な目的論的地理学観の体系を成立せしめる。第二に自然を先(原因)として人間を後(結果)とせんか。所謂環境決定論(地理的決定論)が成立する。但し決定論の代表と目され勝ちなラツツェルの偉大なる体系は、モンテスキュー以来の静態論より更に一步を掘り下げて、人間即自然(動物)として、生物地理学の一部門としての動態的な人類地理学の体系を樹立したところに異色があろう。第三に折衷案乃至は逃避論として二元論的立場を固守せるものとして、地人相關論・交互作用論・景觀論・地域論等をあげることが果して大胆すぎるであらうか。但し、就中地域論は、一転又再転して、新しい意味で第一の人間を先とする立場を強調する傾向が深まっている。アントロポセントリック(人間中心的)とは、特に終戦後の我が国に於ても強調され、再確認され、主流とされている立場であることは衆知の通りである。

人間中心的という点が強調される反映として、地理教育界に於ても、講述の順序を、人文現象を先に述べ、その条件としての地形気候等を後に考察せしむべしとの意見が存するのであるが、これについて私見を披瀝して置きたい。私見によれば、このような意見は、実は尤もらしく見えて、実は極めて枝葉末節にこだわった見解であるどころか、一步誤ればやはり地理的決定論の旧態に停るおそれがあると思うものである。人文の原因として自然条件が存するのではなく、原因は寧ろ主体的な人間の側に存する筈である。与えられた自然を如何に開発し利用しているか、又利用すべきかが重要なのであって自然と人文とを形式的にふりかえてみるだけでは、やはり本末を顛倒するおそれなしとしないのである。

(三) 戦争か、平和か

法則か個性か、自然か人文か……といった問題点は、地理教育の基盤としての、地理的認識の本質に関連した問題であるが、さて正しき地理的認識を教師が獲得しているとしてその結果は果して如何。地理教育には更に最後に極めて重要な縮めくくりの問題があると思う。米国の地理学者トレワルサ教授が、嘗て終戦後日本に來られた時、地理教育の効用如何との質問に対して、我が国の某教授に次のような意味のことを答えられたというのを聞いてゐる。「地理教育は国際理解に役立

つと共に、又戦争に勝ち抜くためにも役立つ」と。試みに手許にある田中啓爾先生著、中等外国地理教科書（戦前版）を開いてみよう。緒言に曰く

「編纂に當っては世界各地の自然及人類生活の情態を理會せしめ、兩者の相互關係を明かにし、特に人類が自然を利用開發して各種の文化を形成せる所以を知らしめ、更に我が国の情勢を基礎とし、諸外国との比較によりて我が国の特性及世界に於ける地位を正しく把握せしめ、以て国民精神を涵養し國家の興隆と民族の發展とに資することに力め、新教授要目の趣旨に合致せしめんことを期した」と。

正しき地理的認識の体得は、「以て国民精神を涵養し國家の興隆と民族の發展とに資する」ことが出来るのである。戦前の我が国の教育が、これを偏狹な独尊主義と誤れる祖国主義にまで昇華せしめたところに悔があるろう。

右と同様のことが、國際理解の教育に關しても云えると思う。地理教育が國際理解に役立つことには異論はあるまいが、極端なコスモポリタニズムや他國礼讚主義に陥っては、劣等感や事大主義の温床となりかねない。戦争にも平和にも役立つ地理教育は、正に良薬であると共に毒薬にもなり得るのであって、唯単に好事家の知識慾を満足せしむるに止るが如き毒にも薬にもならぬ蒸溜水ではない。これを良薬たらしめるか毒薬たらしめるかは一にかかつて地理教育者の責任にあり、地理教育の最後のしめくくりの重要性をここに強調する所以である。（一九五五・九・二）

（註）本稿を草するに當り、特に手許に於て参考にした主なる文献は次の諸書である。

- | | | | |
|----------|----------------|----------------|------------------|
| (1) 高田保馬 | 社会科学通論昭和二十五年。 | (2) マックス・ウェーバー | 社会科学方法論岩波文庫。 |
| (3) 飯塚浩二 | 人文地理学説史昭和二十四年。 | (4) 高野史男 | 地理学本質論ノート本誌五一六号。 |
| (5) 田中啓爾 | 中等外国地理昭和十六年。 | | |